

学会報告

第 13 回日本放射線事故・災害医学会年次学術集会を主催して

第 13 回会長・廣橋 伸之

広島大学 原爆放射線医科学研究所 放射線災害医療開発研究分野
広島大学 放射線災害医療総合支援センター

要旨

令和 7 年 9 月 26 日および 27 日の 2 日間、第 13 回日本放射線事故・災害医学会年次学術集会を、広島大学霞キャンパス放射線災害医療研修棟において開催した。本大会は、広島・長崎への原爆投下から 80 年という歴史的節目にあたり、「広島・長崎 原爆から 80 年 - これでもいいのか、放射線災害医療対応 -」を大会テーマとして掲げた。原子力発電所事故から核攻撃を含む最悪事態までを視野に入れ、放射線災害医療の現状と課題を多角的に議論した。本報告では、主要講演、教育・情報提供セッション、シンポジウム、市民公開講座などを含めた本大会の概要を報告する。

キーワード：放射線災害医療、原爆 80 年、原子力災害、核リスク、国際連携

1. はじめに

本学会は、2013 年に広島で第 1 回大会（会長：谷川 攻一 広島大学教授〈当時〉）が開催されて以降、放射線事故・災害に関わる医療、行政、研究、教育の専門家が一堂に会し、実践的かつ学際的な議論を継続してきた学術集会である。

第 13 回大会は、原子爆弾投下から 80 年という歴史的節目を迎える広島での開催となった。本大会では、放射線事故・災害に関する歴史的経験から得られた教訓と、現在進行形で直面する医療体制整備上の課題とを接続することを主眼に、学術プログラムを構成した。近年、原子力施設を取り巻く安全保障環境は大きく変化しており、原子力発電所事故のみならず、武力攻撃や核兵器使用の可能性も現実的なリスクとして認識されつつある。このような状況を踏まえ、本大会では、

本分野を牽引してきた重鎮の専門家および国内外の有識者から最新の知見が共有された。加えて、症例報告や原子力災害医療体制整備の最前線で活動する実務者から現状と課題が提示された。

これらの講演および討議を通じて、本大会は、現行の我が国における放射線災害医療体制を多角的に再点検するとともに、将来に向けた課題と展望を共有する今後の議論の基盤を整理する機会となった。



学会会長挨拶の様子（広島大学霞キャンパス放射線災害医療研修棟）

連絡先：廣橋 伸之（ヒロハシ ノブユキ）
広島大学 原爆放射線医科学研究所 放射線災害医療開発研究分野
〒 734-8553 広島市南区霞 1-2-3
TEL 082-257-5839 FAX 082-256-7105
E-mail : hirohasi@hiroshima-u.ac.jp 連絡先：広島大学

2. 理事長講演

大会初日は、恒例の理事長講演として、明石眞言先生（東京医療保健大学）により「被ばく医療をめぐる海外での動き」が講演された。IAEA、WHO、OECD/NEA など国際機関の最新報告を踏まえ、放射線緊急時対応における精神心理社会的支援の重要性、ARS 治療におけるサイトカイン療法の国際的コンセンサス、国家備蓄医薬品の考え方などが紹介された。被ばく症例が稀少であるがゆえに、国際的知見の集約と共有が不可欠であることが改めて強調された。



明石眞言理事長

3. レジェンド講演

レジェンド講演では、細井義夫先生（東北放射線科学センター）より、「放射線治療医・放射線生物学者の視点から見た緊急被ばく医療と今後の幹細胞治療への期待」が講演された。福島第一原子力発電所事故時の初動対応経験を踏まえ、造血障害に対する治療戦略、高線量局所被ばくにおける幹細胞・エクソソーム治療の可能性、さらにリスクコミュニケーションの重要性について、豊富な臨床・研究経験に基づく示唆が示された。



細井義夫先生

4. 特別講演

特別講演では、戸崎洋史先生（広島大学平和センター）より、「核兵器不使用の80年とその岐路 — 国際社会が直面する新たな核リスク」と題した講演が行われた。

原爆投下から80年を迎える現在において、核リスクの質的变化と国際社会の課題が整理され、放射線災害医療に携わる専門家が核問題とどのように向き合うべきかについて、強い問題提起がなされた。



戸崎洋史先生

5. 海外特別講演

海外特別講演では、韓国放射線医学研究所（KIRAMS）より2題の講演が行われた。

Kong Chang-Bae 先生は、韓国人被爆者の歴史と KIRAMS の役割について講演し、植民地支配下にあった朝鮮半島出身者の被爆という歴史的課題を提示された。

続いて Cho Minsu 先生は、局所放射線障害の症例レビューを通じて、皮膚障害を中心とした診断・治療の実際を詳述された。両講演は、放射線障害が医学的問題であると同時に、社会的・歴史的文脈を有する課題であることを強く印象づける内容であった。



Kong Chang-Bae 先生

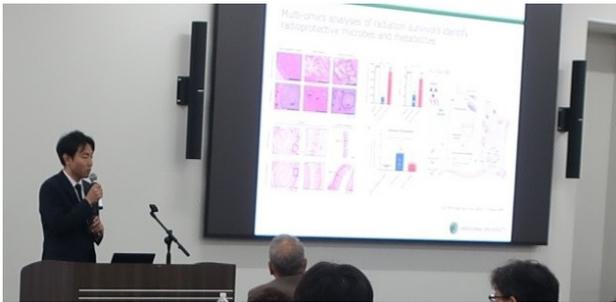


Cho Minsu 先生

6. 教育講演

教育講演では、山賀聡之先生（広島大学）より「急性放射線症候群における DAMPs* の意義と免疫学的影響」が講演された。放射線誘発性細胞障害に伴う DAMPs 放出と免疫機能障害、敗血症との関連について、最新の基礎・臨床研究成果を踏まえた解説がなされ、急性放射線症候群の病態理解と今後の治療戦略を考えるうえで示唆に富む内容であった。

(注) * ダメージ関連分子パターン



山賀聡之先生

7. 情報提供

情報提供セッションでは、Libo Pharma 社の Henry Liu 氏より、造血型急性放射線症候群（HSARS）に対する次世代放射線治療・防護薬候補である LIB-101（recombinant IL-12）が紹介された。非ヒト霊長類モデルでの有効性や、200 名以上の健常者における安全性データが示され、大規模放射線災害時に迅速展開可能なカウンターメジャーとして注目を集めた。

8. シンポジウム「これでいいのか放射線災害医療対応」

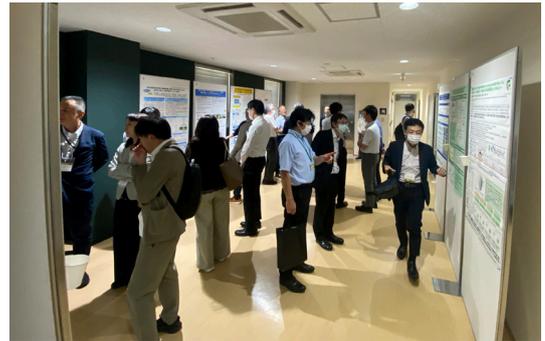
本大会の中核企画として、「これでいいのか放射線災害医療対応」と題したシンポジウムを開催した。原子力災害医療体制の全体像、発電所オンサイト医療の現状、原子力施設近傍病院の課題、人材育成・教育体制、行政の立場からの制度設計など、多方面から現状分析と課題提起がなされた。

福島第一原子力発電所事故から 14 年を経てもなお体制整備は途上にあり、平時からの連携と継続的訓練の重要性が共通認識として確認された。



9. パネルディスカッション・一般演題

パネルディスカッション「事例から学ぶ」では、全国の高度被ばく医療支援センターおよび原子力災害拠点病院から実症例・対応事例が提示され、医療介入を要さなかったケースも含めた幅広い議論が行われた。また一般演題（ポスター）では、原子力災害時の医療体制整備、教育・訓練、疫学調査、線量評価など多様なテーマが発表され、若手研究者・実務者による活発な議論が展開された。



ポスター会場の様子

10. 市民公開講座

本大会にあわせ、会場 1 階研修室において市民公開講座「もし放射線災害が起こったらあなたは？」を開催した。一般市民および医系学生を含む参加者を対象に、放射線災害時に想定される状況や、正確な情報に基づく適切な行動の重要性について概説した。あわせて、GM サーベイメーターの基本的な取り扱い、個人防護衣の着脱に関する実習を行い、さらに模擬患者を用いた体表面汚染検査を実施した。



市民公開講座（体表面汚染検査演習）の様子

11. おわりに

原爆投下から80年を迎えた広島で開催された本大会は、歴史を振り返ると同時に、将来起こりうる放射線事故・災害への備えを問い直す学術集会となった。放射線災害は稀であるがゆえに、記憶と教訓を継承し続ける努力が不可欠である。本大会における議論は、今後の放射線災害医療体制の強化および国際的連携の一層の深化に資するものと期待される。最後に、本学会にご参加いただいたすべての皆様に心より感謝申し上げますとともに、本大会の円滑な運営に多大なご尽力をいただいた運営スタッフならびに関係者各位に、深く御礼申し上げます。